

大神比義命

大神比義は、八幡神を最初に見た人として宇佐神宮の記録に登場する 6 世紀の半伝説的な人物です。大神比義は、当時の日本の首都だった奈良の近くにあった大神神社の神職の家に生まれてと言われています。568 年、欽明天皇（509-571）の勅命により、宇佐地域での不思議な出来事について調査報告をするため、九州の宇佐を訪れました。

説明のつかない出来事は神聖なものであると確信し、大神比義は 3 年にわたって、籠居して祈りを捧げ、儀式的に特定の食べ物を断ち、身を清めました。神社の記録によると 571 年に、その祈りに応じて、神様が御霊水の近くに、彼の前に現れました。その神様は、笹の葉の上に 3 歳の子どもとして現れ、国の守護者になる意向を宣言しました。このようにして、大神比義は八幡神を崇拝する最初の人となりました。

伝説によれば八幡神はその後、鷹に姿を変え、708 年に駅館川のほとりの松の木に飛んで来たと言われています。しかし、その辺りを通る人々の騒がしさは、そのうちに神の怒りを引き起こしました。怒った八幡神を静めるために、大神比義とある巫女が千日間祈り、八幡神のために鷹居社と呼ばれる適切な神社が鷹居山に建てられました。

鷹居社へ移ってから間もなく、八幡神はまたこの場所も騒々しすぎるとしているという託宣が下り、716 年に八幡神はもっと静かな小山田の森の中の神社へ移されました。そこは小さすぎると八幡神が宣言したため、最終的に、八幡神を祀る場所は小椋山の頂上へ移動しました。725 年に最初の御殿がその場所に建てられ、やがてこの小さな神社は宇佐神宮と呼ばれる大きな神社へと変わりました。

八幡信仰の振興への貢献を称えて、大神比義は大神比義命として、末社の神様のような扱いで宇佐神宮の下宮（下の社）に祀られています。